

《書 評》

加藤恕彦著 「アルプス山嶺に消ゆ——母へおくる若き天才音楽家の手紙——」 昭和39年 光文社

同著「ではまた——愛と信仰に生きた若き音楽家の手紙——」 昭和41年 聖パウロ女子修道会

この2つの手紙集は、1963年8月、アルプス山嶺に消えた、神を敬う青年音楽家アウグスチノ加藤恕彦（ひろひこ）のこした人間記録であり、信仰の告白の書である。かれは慶応義塾大学文学部仏文科3年のおりパリ・コンセルバトワールに入学し、フルート科を首席で卒業した。そしてフルート名手ランバルに認められ、さらにモンテカルロ国立歌劇場管絃楽団首席フルート奏者に迎えられた。またそのころフィアンセ・マーガレットと結婚し、両親をヨーロッパ旅行に招いてそれを見送った直後、新夫人とともにモンブラン山群の登山にむかい、その山嶺に消息を絶った。¹⁾「さる8月3日宮庭（モナコ公国の）における最近の演奏会で輝しい成功を収めた国立オペラ交響楽団首席奏者加藤恕彦氏夫妻の遭難のニュースは、音楽界に激しい興奮を巻き起した。1937年東京に生れたこの若き日本のフルート奏者は、モンテカルロ交響楽団の首席フルートになって3年間、輝かしい名声を博していた」というのは、モナコの新聞「エスポワール」のかれへの評価である。

（「アルプス山嶺に消ゆ」p. 250-51.）第1の書「アルプス山嶺に消ゆ」には、かれが両親におくった250通の手紙の過半が収められている。おそらく、かれと親しかった母校の同窓「赤とんぼ」グループの発議によるものと推察する。それはこの若い天才音楽家が育っていった生活記録である。第2の書「ではまた」は、かれの信仰生活の記録である。このほうは、まえの書の出版を知った、また信仰をおなじうする田中澄江女史の推挙によると聞いている。「ではまた」の題名は、かれの手紙に書かれた、両親への最後の永い別れとなった言葉からとったのであることは明らかである。（「ではまた」p. 239. 以下では書名を略する。）けれども、この言葉にも聖歌660番（聖公会聖歌では497番）のおりかえし、²⁾「また会う日まで」の香りがしみ入っているようにおもう。

かれは「宗教問題は考えるほど、ばくぜんとしてきて途方にくれ」とも告白しているが、（p. 75.）1958年9月パリーに着いてさっそく額（ぬか）づいたのは、ノートル・ダム寺院、聖女テレジアの像のまえであった。また第1の日曜日にミサを受けたのは、パリのサン・シュルピスの教会であり、かれはその古い教会いっぱいにあふれるパイプオルガンの音を、「天から降ってくるよう」と感激して聞きいる。（p. 5-6.）

かれは若いセンスをもって、文化と伝統を異にするヨーロッパの環境に身をおいて、さまざまな印象を感じとったようである。パリに住みついて、はやく、かれのいわゆる「生へのすごい執着」と retrait（黙想あるいは「一步退いて全くちがった世界にはいること」、p. 18.）とを調和させているフランス人のボン・サンスにうたわれている。（p. 19.）また「音楽とカトリック精神を学び」とるためにこの国に留学してきたかれであったから、（p. 66.）音楽における形式（フォルム）に関連して、かれは「愛そうと思ったら、おきてを守れ、」（cf. ヨハネ、13・34、14・15）というおきての意義の重要性を考えた。（p. 89, 91.）かれは「愛を具体化する過程、方法、すなわちフォルムがおきてである」と

いうのである。(p. 89.) またさらに、そのおきては、われわれを縛るおきてではない。

「森の美女」(p. 198.)である。「愛には限りがない。」夜半に15回赤ん坊のために起きるおかあさんは、16回めはわたしは今晚はもうじゅうぶん起きたからよい、とは言わない。何回でも起きる。p. (178.) イエスの言葉は「心をつくし、力をつくして…愛せよ」である。(p. 174, 178. cf. マタイ, 22・37) そこに底(そこ)がないのが「愛」であり、それが「最大のおきて」である、とかれは結論する。(p. 178.) 「アムルー amoureux でないキリスト信者は、ほんとうの信者ではない。」(p. 178.)

かれはまた若いところで、「カトリックの根本思想」は——といている。少々生意気なかな——「連帯思想」だといっている。(p. 197.) キリスト教(とくにカトリック)のいちばん新しい、そして最も正統的な信仰は、ひとりというよりは、「神の民」という共同体の立場に立って深められてきて」いる。(p. 204.) 「すべての人間は、神の愛において1つの有機体的存在で、われわれはそのなかの1つの細胞に過ぎない。」(p. 205.) ミサは世界じゅうの人々の救いのためにささげられる完全な「犠牲」であって、ひとりひとりではなく、それに加わっている人も、そうでない人も、「神の方に進むべくみ旨にかなった生活をしている人のためである」という意味で、「共同体的意義をもつ」と解し、(p. 168.) 「ある日、キリストの愛のなかでほんとうにすべての人間が神の栄光の姿をとって、完全に有機的に結びつき、燃えたつ日が来る」(p. 221.) と信じた。「愛は有機的な状態の極致である。」(p. 211.) それが「キリストの超自然的プラン」だというのである。(p. 205.)

ほとぼしり出て、「全世界を(も)焼きつくす」のが、神の「火の愛」であり(cf. ヘブル 13・29) また神の子「イエズス様の愛」である。(p. 167.) 「神様はわれわれがすぐころぶことぐらい承知でおられる。神様はわれわれの弱点をもひっくるめて愛して下さる」と信頼し、(p. 178.) また「神様は、想像もつかぬすばらしいものを恵んで下さる。」(p. 119.) 「いっしょうけんめいにやれば、神様はじめ、パパ・ママ、その他わが身にかかわりある人が助けてくださる。」(p. 92.) 「重荷はキリスト様がしよって下さる。」(p. 175) 「できると思ったことは、きっと天主様がでかして下さる。」と安心し切って「全力をあげ」(p. 73.) 「キリスト様は今でも生きている。今でも何度もぼくたちに呼びかけている」(p. 187.) と信じて、「もてるかぎりの愛と信頼でもって」(p. 198.) 神に寄りかかった。

「信仰は、望んでいる事がらを確認し、まだ見ていない事実を確認することである。(見ぬ物をまこととするなり)」(ヘブル 11・1. cf. 関根文之助「聖書の読み方」(p. 203.) 「義によって天主によみされるのではなく、信仰によるのだから、自分でできるだけやってあとは天主がはかられるのに任せ、自分で他人や自らをはかるな。」(パウロ) (p. 124. cf. ガラシャ 2・16. ロマ 3・28) 「ほんとうに神を見たてまつることは、けっしてやさしいことではない」(p. 125.) また「超自然的な神との対話は不可能」といい、(p. 19.) さらにまたそののちにも「ぼくは神様の意思をこんなにもはっきりと見たことはありません」(p. 194.) と告白するかれであつたけれども、のちにかれの夫人となったマーガレットも、「ありたけの力でベストを尽し、ただ神と隣人とに感謝なさい」と力づけ、(p. 100.)³⁾かれ自身もことある毎に、「ほんとうに天主様が僕にあえてこの運を与えてくださったようで、驚きと感謝でいっぱいです。」(「アルプス 山嶺に消ゆ」p. 29.) 「ほんとうに 神様のお恵み

と、それにパパ・ママの育てた苗木のたまもの」とつくづく感謝している。(p. 118-19.)

わたしは、かれに「灯は1夜ともされたら何もする必要がない。真のクリスチャンは、ただそこにて、神の愛に満されてその喜びと熱に輝いていればよい」という、かれ自身の言葉どおりの、キリスト教的というのではない「キリスト信者」(p. 180.)の姿を見るように思える。かれは謙遜に (cf. 「アルプス山嶺に消ゆ」 p. 149, 104, 106.) 「ぼくの信仰が、ほんとうのカトリック——セクトとしてのカトリックではなく——ほんとうのウナム (唯一), サンクタム (聖), カトリカム (公) エクレジウム (教会) を信じる段階にやっとはいりかけたところ」(p. 164.) といっているけれども、十二分にその言葉を是認していいと思う。わたしには、「だれでも、つらい試練があればこころびますし、あわててへまもします。しかし長い目で見てこの小さな失敗は問題ではない。かえって、ころんだりするようなつらさを経て、一步一步神様を逆にもっと好きになり、もっと信頼できるようになること。これを毎日最後までくりかえすこと、これがわれわれの最大のおきてであり、また「権利」でもある……。われわれの努力は、一見失われた「ほねおり損」に見えても、実はキリストを通じて永遠にわれわれ全人類の永遠、完全化にあずかってたくわえられていくと思うのです」(p. 211.) というのが、かれがその短い生涯の体験によって得た結論であったように思える。わたくしはかれに、純粋汚れのない篤い青年信徒の姿を見るのである。

ついでだが、かれは「音楽会はぼくの人生のなかでいちばん聖なる瞬間の一つだ」(p. 122.) というかれの手紙が、音楽に満ちているのはいうまでもない。しかしかれ自身はフランス文学の学生であったのだし、父もかれの母校のドイツ文学の教授である。だから、いたるところにフランス、西欧の四季おりおりの風物の移り変わりや、絵画、芝居、庭園の鑑賞批評の文章がつづられており、教養的にも読んで面白い本であることを書き添えておきたい。また筆者に贈られたこの両書の扉に記された「主よ、永遠の安息をかれらに与え、絶えざる光りをかれらの上に照し給え。」「願わくは、かれらが絶えず望み奉りし救いをば、われらの切なる祈りによりてこうむらし給え」という、母なるひとの祈りと願いのうちにも、この青年信徒を育てた家庭環境が偲ばれる心地がする。

- 1) 恕彦君の遺体は翌年の夏発見されたが、夫人についてはなお消息を聞かない。
- 2) 「生きることにもっと正しく執着せねば、キリスト教は生きてはこない」というのがかれの所見である。(p. 61-62.)
- 3) この天に結ばれたふたりを偲んで、「くすしきものに作りたまひ、これをなおすばらしき姿にと改められた」という言葉を思い出すのは、わたしひとりではありますまい。

追記 本稿を書くに、「隣り人」(cf ルカ, 10・29~37.) 大野宏氏からカトリック信仰について教えをうけたことをしるして謝意を表する。

(アンデレ 三辺清一郎)